CALL& Current Affairsについての学生の意識に関する研究
—「ＳＡＲＳ」についてのCALL教育：Presentationを通しての英語教育 —

山西敏博*

Research on Awareness of Students at Technological College about CALL and Current Affairs --- CALL about SARS : English Education Through Presentation ---

YAMANISHI Toshihiro

要 旨

本論は時事問題に対しての関心度合いや授業受講前後のインターネットによる主たる検索(Computer Assisted Lnguage Learning: CALL)の推移、英語による発表(Presentation in English:PIE)を行うことへの意識の変遷、また英語理解・会話への意欲の推移を調査したものである。従来の英文和訳といった英語指導方法にとどまらない、CALLやPIEを駆使した指導方法が学生の英語授業受講意識をどのように変えていくかを分析することを目的とする。

Abstract. This paper aims to have students interact through cooperative leaning with CALL and presentation in English (PIE) and to examine what influence they have on such learning styles.

1．研究の動機・目的

本論は時事問題に対しての関心度合いや授業受講前後のインターネットによる主たる検索(Computer Assisted Lnguage Learning: CALL)の推移、英語による発表(Presentation in English:PIE)を行うことへの意識の変遷、また英語理解・会話への意欲の推移を調査したものである。従来の英文和訳といった英語指導方法にとどまらない、CALLやPIEを駆使した指導方法が学生の英語授業受講意識をどのように変えていくかを分析することを目的とする。

情報化社会が反映される昨今、社会人だけでなく中・高校生及び高等専門学校生等の学生にとってもコンピューターやインターネットは今や日常生活において必須の道具となりつつある。学生の中には自らホームページを開設し自分から情報を発信することにより、学校の中だけではなく校外にもその交流の範囲を広めながら自分の世界を積極的に広げようとする意欲に溢れる者もいる。高等学校でもこのようなコンピューターを利用して学習の領域（CALL: Computer Assisted Language Learning）を広げるべく、2003年度より文部科学省は「総合的な学習の時間」を設けて幅の広い学習を進めることができるよう推奨している。

一方、学校での授業も従来の教科の枠の中だけにとどまらない形式も要求されている。時事問題についてNIE（Newspaper in Education）活動の活発化が取り沙汰されてきており、それを各教科の時間を踏まえて、様々な手法で時勢に見合った教材を提供している。教師が黒板と教科書のみを用いて教え、生徒はそれを指示に従って聞いていくといった一方通行の授業形態だけでは収まらなくなってきている昨今、教師と生徒が一体となって教え育む、また、学生

* 助教授　文系総合学科

自体が授業の主役となり、教師はその補助の役目（facilitator）として必要な時にだけ援助、支援を行なうといった学生の自主性を育む教育の形態（Independent Study）が要求されつつある。一つのテーマに沿ってあらゆる教科の考え方を導入して、教科としての「タテ」のつながり（vertical aspect）のみならず「ヨコの連携」（horizontal aspect）によって学生自身が自主的、多面的に物事を学ぶということに取り組ませようというのが「総合学習」の基本的理念である。また,「協調学習（Cooperative Learning)」もここ数年注目を集めている実践形式でもある。この形式を現在の英語での授業形態の中に取り入れ、学生に真の「学習」をさせつつ、CALLに関する意識調査を行ない、その分析をするというのが今回の研究目的である。

2．先行研究の整理

Krashen（1983）は「i+1」理論を説きながら、「語学の習得に関しては情意的な前提条件を持たせつつ学習者自身が心を開いて情報のinputを受け入れる、いわゆる情意フィルターを低くすることが何よりも大切である。その要素として学習者の興味を引く適切な話題に焦点を当てた活動、学習者同志及び指導者に対する好印象や不安を感じない中で学習科目を習得すること、更に自己に対するある程度の自信を持たせる」(p.20-21)ことから学ぶべき教材は習得されていくといったことを述べている。

文部省（1998）は改定の学習指導要領の中にある英語教育の目標の中で「英語を理解し、英語で表現できる能力を養い、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める」ということを推進している。

山西（1999）はインターネットからのトルコ大地震の記事を検索し、それに対してグループ学習を通じて読解を図ることを通じて、生徒のインターネットに対する興味の推移を研究した。更に山西（2000）は生徒に教科名だけを例示して、生徒はそれに対してインターネットや各種文献等を通じて自主的にその教科名の内容に沿った形でPRESENTATION用の資料（handout）を作成し、最終的にはその大半を英語で発表するといった実践も行った。また2001年度には、勤務高の海外修学旅行に合わせてハワイでの真珠湾攻撃に関する題材をシンガポールの歴史教科書から学ばせ、生徒自主作成の発表用資料(presentation handout)を元に原則的に英語でpresentationを行なうといった「発信型英語」の実践も行っている。

2002年度には海外修学旅行対策の一環として行った「Australia、New Zealand」についての文化調査をCALLを用いて行ない、研究成果をあげている。

吉住（2000）は「開発教材－インドヒマラヤの森林開発」に着目し、英文の資料等を用いて生徒にロールプレイによる実践を施し、森林開発の是非を身を持って体験させるという実践を行った。京都府立紫野高校（2000）は「京都府における環境問題」を焦点に据え、生徒にグループ学習として「ゴミ問題」を取り扱い、その集計報告を英語によるホームページとして作成するという実践を行なった。唐澤（2000）はインターネットを用いて教材の内容理解を図るために参考として映画のホームページを見せたり、外国の歌手の情報に関する検索を行ったりしている。菊池（2000）はインターネットを使った授業へのアプローチの中で、ホームページを利用した身近なテキストを作成したり、ホームページを利用するなどして資料を収集し、その中から新聞記事を検索して内容の読解を行なっている。

Cooperative Learningについてはアメリカから様々な理論が取りざたされている。その定義としては「学習者がグループ活動の中で互いの学習を助け合い、相互的に補完をしつつ一人一人の学習に対する責任を果たすことで、グループとしての目標を達成していく協調的な相互依存学習」ということができる。

Slavin(1995)は従来の「教師主導型の授業展開」については「教師一人が同時に全ての生徒に対して肯定的な評価をすることは困難である。時に、一人の生徒の成功が他の生徒の成功する機会を妨げることになる。ある生徒が教師の質問にうまく答えられたとき、他の生徒は自らの能力を評価してもらう機会を逸する。(中略）この結果、どうしても「協調」よりも「競争」の要素が学習に影響を与えることとなる。「競争」自体は適切に導入されれば、熱心に学習に向かわせる有効な概念となりうる。しかし、教師中心の競争型の授業では、むしろ一生懸命に学習する生徒は、他の生徒から「教師のお気に入り」として避けられることも多い。特に、他の生徒との関係が非常に重要な思春期には、競争型の授業のもたらす結果は、学習自体を否定的にとらえる学習者を多く生み出すこととなる」と述べている。

一方、Cooperative Learningについては「学習者個人の能力を向上させる機会とそれに対する報酬が保障されるので、学習に対する動機づけを高めることができ、また学習者が学習自体に対する肯定的な意識を共有することも予想される。特に言語教育においては、グループ活動を行なうことで学習者が積極的に活動する雰囲気を作り出し、情意面でのフィ

ルターが下げられるとも考えられる」(Krashen, 1982;Long and Porter, 1985; Brown 1994a, 1994b) と捉えられている。

また, Cooperative Learningを認知構造の再構築という考え方として捉え, Ausubel(1968)やBrown (1994a) は「学習した情報を自らの認知構造に結びつけるように再構築することにより、長期的な記憶は可能になる」という諸理論を述べている。更にSlavin(1995)も「グループの中で互いに説明しあい練習しあうことは、この再構築に最も効果のある手段」であると考えている。この考えに基づいて、協調学習では学習者はグループの中で互いに聞き手と教え手になり、学習した項目を再生することで学習事項の再構築を行なうことができる。

3. 研究仮説の設定

1) コンピューター・インターネットに対する関心の度合いは、PRESENTATION に対する準備の度合いに比例する。
2) コンピューター所有していない学生がその後自分でコンピューターを操作するような時には、授業で取り上げたような社会・時事問題に関心を示す。
3) PRESENTATION に関する興味・関心は、導入の仕方によって変化する。
4) 英語で説明する仕方次第では、事前の作成資料のできばえに対する評価と、その後の発表のできばえに対する評価が変化する。
5) 英語で自分の意見が発表できるようになる意欲や英語を理解できるようになりたいという知識欲は、学生相互の取り組みによって変化する。

4. 調査の対象・期間

北海道にある工業高等専門学校3年生82名を対象に2003 (平成15) 年6,7月の2ヶ月間を調査期間とした。所属は機械工学科43名、情報工学科39名である。対象生徒の英語能力を図る基準として英語検定試験での取得者数をその目安とする。2003年４ 月現在までで英検５級 (中学1年修了程度) 取得者が6名 (7.6%) 、４級 (中学2年修了程度) が13名 (16.5%) 、３級 (中学修了程度) は24名 (30.4%) 、準２級 (高校２年中間修了程度) は７名 (8.9%) 、未取得者29名 (36.3%) となっている。

5. 調査方法・実践概要

授業の実践を一つの柱として関連する取り組みを考えた。調査方法・実践概要は以下のとおりである。

第１・２校時：テーマに関係したVTRの鑑賞
第３　　校時：各テーマの紹介、英語による発表の仕方の紹介・・教師主導、学生班方法の確認
第４－６校時：各班ごとに提示英文原稿の読み合わせ・・学生班主導、教師助言
第７－９校時：発表資料の作成、できしだいPRESENTATION原稿の作成・・学生班主導、教師助言
第10－12校時：PRESENTATION IN ENGLISH
第13・14校時：感想文・アンケート調査

6. 実践方法

授業実践は以下の形式で行なった。

６－１　授業実践：

A. 授業題名　PRESENTATION ABOUT CURRENT AFFAIRS : SARS

B. 授業目標

1) テーマに沿って内容に合うものを各班で見つけ出し、それをまとめていくという創造力、及び集団における統率力を互いに養う
2) 情報収集の際には必ずインターネットを用い、情報を検索するといったコンピューター機器の利用方法を身につけさせる

3）まとめあげたものを英語を用いて発表するといった、アメリカの大学におけるゼミナール形式の仕方を教えるとともに、外国語であっても自分の意見を言う事の重要さを身につけさせる

6－2　作成資料

A．インターネット活用資料

＜TIME班＞・Hot Wired Japan(2003) 下水施設の不備が原因、コロナウイルス原因説 2003.6.18
http://www.hotwired.co.jp

・ NIKKEI NET (2003) SARS電子顕微鏡写真 新型肺炎SARS 2003.6.19
http://health.nikkei.co.jp/sars/pindex.cfm?page=8

・ World Health Organization(2003) Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS)
http://www.who.int/csr/sars/en/

・東京都感染症情報センター(2003) 重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome）重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome）
http://idsc.tokyo-eiken.go.jp/SARS/sars-topics.html

・ 毎日新聞(2003) http://dream.mainichi.co.jp/index.html

＜Newsweek班＞

・ CBC News（2003）Where did SARS originate SARS: Questions and answers
http://www/cbc.ca/news/indepth/background/sars/html

・ World Health Organization(2003) Cumulative Number of Reported Probable Cases of SARS Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS)
http://www.who.int/csr/sars/country/2003_06_25/en/

・ World Health Organization(2003) SARS: Number of Current Probable Cases as of 25 June 2003,18:30 GMT +2 Severe Acute espiratory Syndrome (SARS)
http://www.who.int/csr/sars/en/map 2003_06_25.gif

・厚生労働省(2003) SARS感染地域に滞在された入国者の方へ http://www/forth.go.jp

・ 在瀋陽日本国総領事館(2003) SARS とは 重症急性呼吸器症候群
http://www.shengyang.cn.emb-japan.go.jp/SARS.index.html

・ 東京都感染症情報センター(2003) 重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome）重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome）
http://idsc.tokyo-eiken.go.jp/SARS/sars-topics.html

＜MacLean's班＞

・ @nifty(2003) アジアの観光業会、SARSで300満員が職失う NEWS@nifty
http://newsflash.nifty.com/news/te/te_reuters.JAPAN-116448.html

・CBC News（2003）Where did SARS originate SARS: Questions and answers
http://www/cbc.ca/news/indepth/background/sars/html

・goo(2003) カナダの肺炎死者32人,2ヶ月ぶり肺炎死者ゼロ 封じ込めは可能とWHO
http://www.news.goo.ne.jp/ news/kyodo/kokusai/20030605/20030605a3950.html

・NIKKEI NET (2003) トロントでSARS死者新たに1人更に5人の可能性

http://biztech.nikkeibb.co.jp/wcs/leaf/CID/onair/biztech/medi/249953
・ アサヒ・コム(2003) SARS トロントで新たに2人死亡 高校の休校も 新型肺炎 SARS 2003.5.29 http://www.asahi.com/special/sars/TKY200305290135.html
・ 厚生労働省(2003) http://www/mhlw.go.jp/topics/2003/03/tp0318-lg.html
・ 京都新聞(2003) 2003.6.20 http://kyoto-np.co.jp/news/flash/2003jun/02/CN20030620100

B. 書籍等活用資料

＜TIME班＞・Lemonic, Michael D et.al (2003) THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 PP.14-17, Toronto: TIME Canada Ltd.
・Lemonic, Michael D et.al (2003) GLOBAL REACH, THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 PP.16-17, Toronto: TIME Canada Ltd.
・Lemonic, Michael D et.al (2003) Curbing the Sperad, Rapid Mutation, Will It Keep Spreading? THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 PP.18-19, Toronto: TIME Canada Ltd.
・ 日本テレビ (2003) SARS 関連情報 ズームイン朝！ 2003.6.24 東京：日本テレビ

＜Newsweek班＞
・ Calb, Claudia(2003) The Mystery of SARS NEWSWEEK 2003.5.5 pp.13-17 New York: NEWSWEEK.Inc
・ Calb, Claudia(2003) The New Bug The Mystery of SARS NEWSWEEK 2003.5.5 pp.18-19 New York: NEWSWEEK.Inc

＜MacLean's 班＞
・MacQueen, Ken (2003) SARS:HOT SPOTS SARS: FEARAND LOATHING OF TORONTO MACLEAN'S 2003.5.5 pp.18-22, Toronto: Rogers Publishing Ltd.
・MacQueen, Ken (2003) VOICES FROM THR FRONT SARS: FEARAND LOATHING OF TORONTO MACLEAN'S 2003.5.5 pp.22, Toronto: Rogers Publishing Ltd.

６－３ 第１・２校時実践概要

英語による文献研究を行なう事前情報の伝達として、この直前に緊急で放送されたテレビ番組を視聴させた。題名は以下の通りである。

日本テレビ (2003) 緊急放送 SARSとその恐怖、SARSに立ち向かった医師 スーパーテレビ特番
日本テレビ (2003) 緊急放送 SARSとその対応策 特命リサーチ200X

これらを見ることにより、世界で急激な広まりを示している「重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome)」の起こっている状況を把握させ、そこからその対応策を事前に知った上で、改めて文献研究に取り組むという形式を取った。

６－４ 第３校時実践概要

山西（1999, 2000, 2001）が行なったインターネットから資料を教師が検索し、それを生徒が共同学習(Cooperative Learning : CL)で段落毎に内容を要約し発表するという実践や大まかなテーマのみを提示し、その具体的な内容や資料作成を生徒各自に委ねるという実践を応用する形式として、発表用の資料作成(Presentation Handout: PH)は最初にTIME,NEWSWEEK, MACLEAN'S という３冊の本の内容をCLでお互いに補完しあいながら読む形を基本としてその要約をPHにまとめさせ、加えて３冊とも主題となっているＳＡＲＳに対する最新の情報収集を全てインターネットから収集する形式を取って作成させた。これは学生独自の自主学習（Independent Study）を尊重した方が創造性、自立性を養えるのではないかという発想から生み出したものであった。

このテーマは今年度に入ってから諸外国で急激に流行し出した新種の新型肺炎であり、我が国には流行する兆しはこの時点ではまだ見えてはいなかったものの、この病気に対する打開策は全くといってよいほどなす術がなかったものであったため、なおさらこの病気に対して自らが関心を抱かせ、自分達自身での対応策を考えていかなければならないと考え導入した題材であった。

加えてその資料に基づいた発表を英語版でPRESENTATIONと呼び、英語による発表（PIE）の仕方の雛形を提示した。その形式は以下のとおりである。

We chose the topic of _____ because_____.
The content was as follows; _____.
We thought through this presentation that _____.
Thank you very much.

ただし、２つ目の「内容（Content）」部分は実践対象がこういった発表を初めて行なう高専３年生であったため、PIEがどうしても困難な場合には日本語での発表も可とした。他は全て英語による発表とした。これは発表内容自体が社会科的、生物学的な内容になっていったとしても、あくまでも英語の授業の中で行われるものであることから、英語で発表することを前提とさせている。

６－５　第４－６校時実践概要

班ごとにTIME, NEWSWEEK, MACLEAN'Sの3冊から読む記事をそれぞれで選択させ、英文原稿の読み合わせを行っていった。必要に応じて辞典の使用、図書館やインターネットの活用を認めた。資料は全ての班がインターネットを操作して最新情報の検索を図ってきたが、必要な検索が思うどおりに運ばずに数時間を要する所も出てきていた。インターネット操作に関しては教師が操作の仕方に関していくつかの検索エンジンの紹介やその検索方法、また、参考文献で入手困難なものについては助言を与えながら提示し、加えて引用文献の書き方も指示した。将来的に論文を書くことがあるということを前提に、文献引用の書き方も重要な要素となるであろうことを意識してＭＬＡ方式での記し方を提示した。班ごとで学生独自が主導となり、教師は助言を行なう役割を担っていった。

６－６　第７－９校時実践概要

英文記事の読み合わせを行った後、その要約をB4版のPHにまとめさせていった。それらの作成ができ次第、次にPIE用の原稿の作成を指示した。これは単なる和文英訳の英作文ではなく、自らの班が行ってきた内容を英語で表現するといった、いわゆる「発信型英語」のストラテジーをもくろんでいる。これらもこれまでと同様に班ごとで学各自が主導となり、教師は助言を行なう役割を担っていった。

６－７　第10－12校時実践概要

それぞれの資料を全員に配付し、授業時間ごとに２班ずつ、各班20分間でPIEを行っていった。中には作成資料だけではなく写真や本を用いるといった工夫を凝らして行なう班もあった。

６－８　第13・14校時実践概要：

上記のPIE　を踏まえての感想、及びアンケート調査を行なった。インターネットによる情報検索の利便性、大勢の人達の前で発表することの難しさ、大切さ、協力して一つのものを成し遂げていくことの重要性、今後これらが大学におけるゼミナール形式や企業におけるPresentationに連携していくことへの期待感などが記された。

７．調査の結果

全14時間にわたる一連の授業実践に関連して、以下の３点についての意識調査をPre-Questionnaire, Post-Questionnaire形式で行なった。(N＝82)

質問項目：１．（コンピューター所有者のみ対象）

この授業以前にインターネットでは主に何を検索していましたか。
(Pre- Questionnaire)

2．（インターネット検索者のみ対象）
この授業に必要なインターネットでの検索時間はどのくらいでしたか。

3．この授業以後にインターネットでは主に何を検索したいと思いますか。
(コンピューター所有者・非所有者別: Post- Questionnaire)

4．English Presentation授業を行なうということについて、最初はどのように思いましたか。
(Pre- Questionnaire)

5．Presentation授業を行った後、こういった授業形式についてどのように思いましたか。(Post-Questionnaire)

6．（1）どのPresentation　の作成資料に興味を持ちましたか。
（2）どのPresentation　が上手だと思いましたか。

7．英語でのPresentationを行ないましたが、
（1）今後、より英語を理解できるようになりたいですか。
(Improvement for Listening Comprehension)
（2）今後、より英語を話せるようになりたいですか。
(Improvement for Speaking Competence)

回　答:

表1

1．(Pre-Q)

・コンピューター所有者（N_1 ＝３９）

1）ニュース関連：	5	2）趣味・娯楽：	１８	3）ゲーム：	4
4）スポーツ　：	4	5）音楽　：	5	6）その他：	1

・コンピューター所有者（N_2 ＝４３）

1）ニュース関連：	3	2）趣味・娯楽：	１２	3）ゲーム：	3
4）スポーツ　：	2	5）音楽　：	5	6）その他：	2

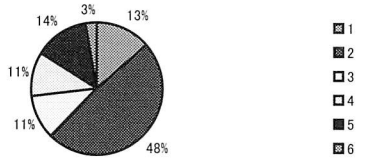


図1a

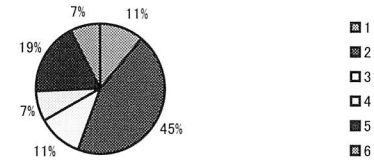


図1b

表2

2．　N1：　.91　(2.0, .5)
　　N2：　1.43　(4.0,0.5)　（＊単位 Mean Hours (Max, Min) ）

表3

3．(Post-Q)

・コンピューター所有者（N_1 ＝３９）

1）ニュース関連：	１５	2）趣味・娯楽：	１１	3）ゲーム：	2
4）スポーツ　：	2	5）音楽　：	3	6）その他：	1

・コンピューター非所有者（N_1 ＝5）

1）ニュース関連：　2　2）趣味・娯楽：　1　3）ゲーム：　1
4）スポーツ　：　0　5）音楽　：　1　6）その他：　0

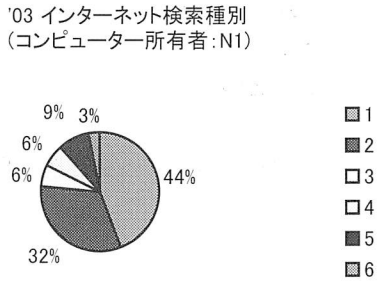


図2a

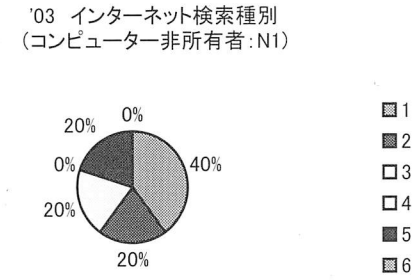


図2b

・コンピューター所有者（N_2 ＝２７）

1）ニュース関連：　9　2）趣味・娯楽：　１０　3）ゲーム：　1
4）スポーツ　：　2　5）音楽　：　4　6）その他：　1

・コンピューター非所有者（N_2 ＝１６）

1）ニュース関連：　3　2）趣味・娯楽：　4　3）ゲーム：　2
4）スポーツ　：　2　5）音楽　：　3　6）その他：　2

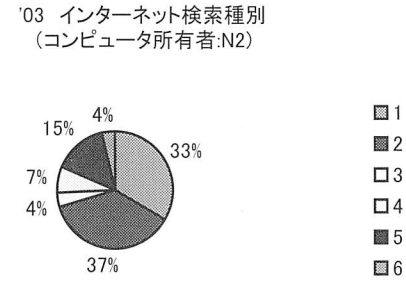


図2c

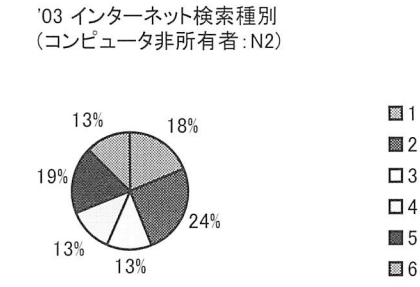


図2d

表4．（参考）「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)

1．(Pre-Q)

・コンピューター所有者（N_1 ＝２１）

1）ニュース関連：　1　2）趣味・娯楽：　１１　3）ゲーム：　4
4）スポーツ　：　2　5）音楽　：　2　6）その他：　1

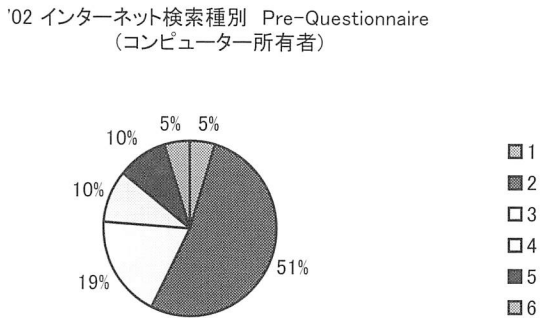


図３

表５　（参考）「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)

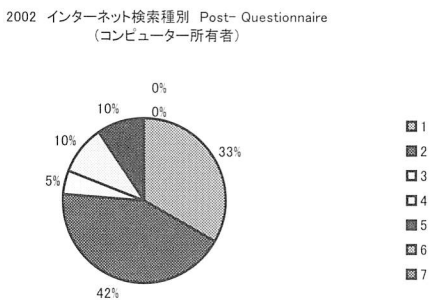
３．（Post-Q）

・コンピューター所有者（N_1 ＝２１）

１）ニュース関連：	７	２）趣味・娯楽：	９	３）ゲーム：	１
４）スポーツ　：	２	５）音楽　：	２	６）その他：	０

・コンピューター非所有者（N_2 ＝１４）

１）ニュース関連：	４	２）趣味・娯楽：	４	３）ゲーム：	１
４）スポーツ　：	１	５）音楽　：	２	６）その他：	２



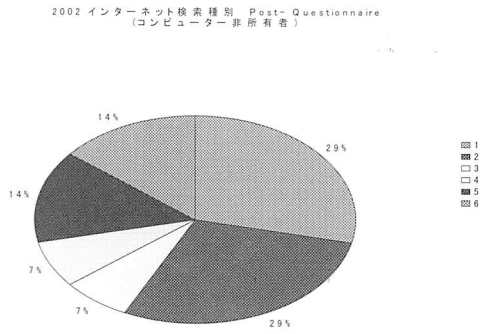


図４a　　図４b

表６（参考）「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)

２・Gold Coast: 1.0 (1.5, 0.5)　・Aborigines: 1.7 (3.0, 0.3)　・Fame :3.0 (3.5, 2.5)
　・All Blacks: 1.5 (1.5, 1.5)　・Maoris　: 1.0 (1.0, 1.0)　・Flag :0.4 (0.5, 0.3)
（＊単位 Mean Hours (Max, Min) ）

表７

４．５．

項　目	(N_1＝３９）人　数（人） １．<Pre-Q>	人　数（人） ２．<Post-Q>	Post - Pre（人） （２）－（１）A	対比率（%）(pt.) A ／ １
１）かなり難しそう	１３	７	－７	－５３．８
２）やや　難しそう	１４	１８	４	２８．６

3）どちらでもない	6	5	−1	−16．6
4）やや　易しそう 楽しそう	2	3	1	50．0
5）かなり易しそう 楽しそう	4	6	2	50．0
Mean	2．23	2．56	．31	+13．9

項　目	(N_2= 43) 人 数（人） 1．<Pre-Q>	人 数（人） 2．<Post-Q>	Post - Pre（人） （2）—（1）A	対比率（%）(pt.) A ／ 1
1）かなり難しそう	20	6	−14	−70．0
2）やや　難しそう	13	15	2	15．4
3）どちらでもない	3	6	3	100．0
4）やや　易しそう 楽しそう	1	3	2	200．0
5）かなり易しそう 楽しそう	6	13	7	85．7
Mean	2．07	3．05	．98	+47．3

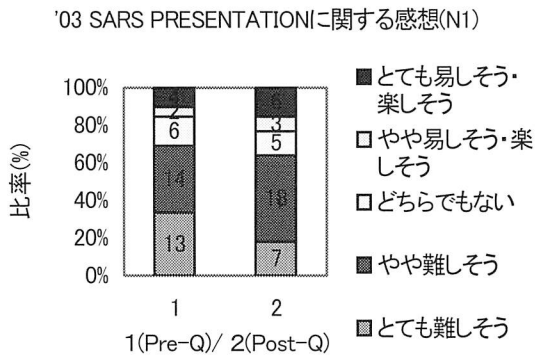


図5a

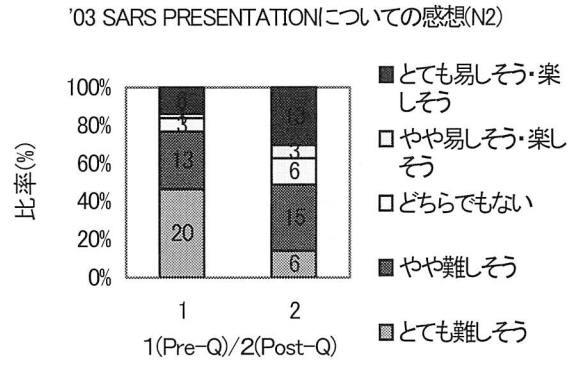


図5b

表8（参考）「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)

4．

項　目 (N=35)	人 数（人） 1．<Pre-Q>	人 数（人） 2．<Post-Q>	Post - Pre（人） （2）—（1）A	対比率（%）(pt.) A ／ 1
1）かなり難しそう	6	5	−1	−16．7
2）やや　難しそう	15	14	−1	− 6．7
3）どちらでもない	6	2	−4	−66．7
4）やや　易しそう 楽しそう	0	0	0	0
5）かなり易しそう 楽しそう	8	14	6	133．3
Mean	2．69	3．11	．42	+15．6

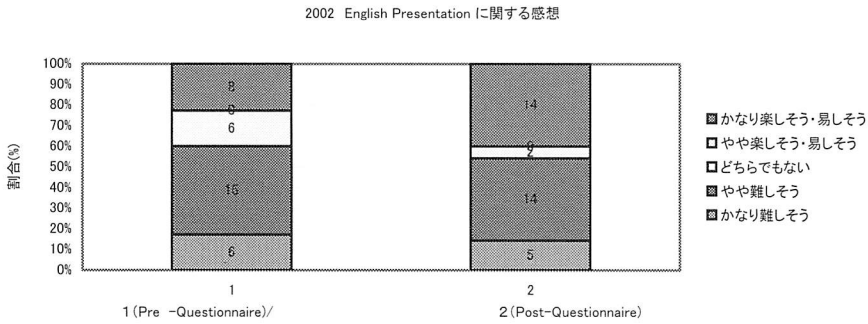


図6

表9

6．7．

項　目 (N_1=39)	人 数(人)（2）	人 数(人)（2）－（1）(人) B	対比率(%) B ／（1）	（1）
1）TIME 1	5	5	0	0．0
2）TIME 2	4	5	1	25．0
3）NEWSWEEK 1	6	4	－2	－33．3
4）NEWSWEEK 2	17	3	－14	－121．4
5）MACLEAN'S 1	1	1	0	0．0
6）MACLEAN'S 2	6	21	15	250．0

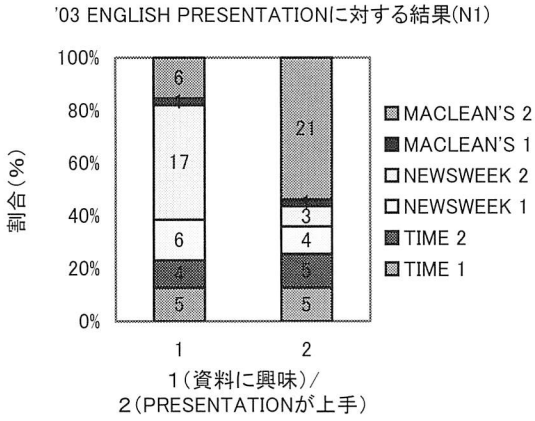


図6a

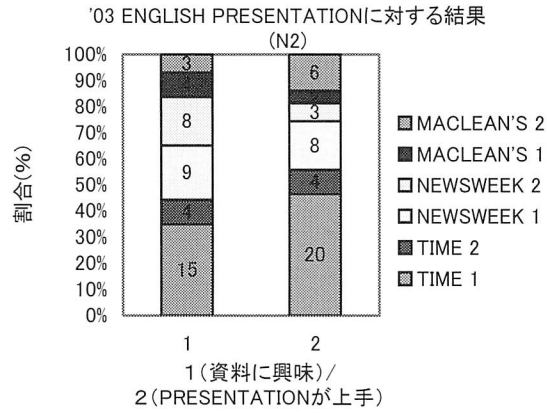


図6b

表10

6．7．

項　目 (N_2=43)	人 数(人)（2）	人 数(人)（2）－（1）(人) B	対比率(%) B ／（1）	（1）
1）TIME 1	15	20	5	33．3
2）TIME 2	4	4	0	0．0
3）NEWSWEEK 1	9	8	－1	－11．1
4）NEWSWEEK 2	8	3	－5	－62．5
5）MACLEAN'S 1	4	2	－2	—50．0
6）MACLEAN'S 2	3	6	3	100．0

表11　(参考)「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)

6．（1）（2）

項　目 (N=116)	人　数(人)（2）B	人　数(人)（2）B	（2）－（1）(人) B	対比率(%) B／(1)	(1)
1）Gold Coast	5	0	－ 5	－100．0	
2）Aborigines	6	8	2	33．3	
3）Fame	3	0	－ 3	－100．0	
4）All Blacks	1 0	1 4	4	40．0	
5）Maoris	1 1	1 2	1	9．1	
6）Flag	0	1	1	(100．0)	

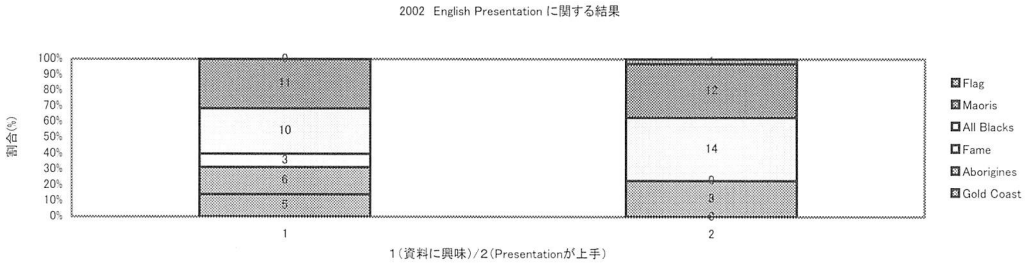


図7

表12　8（1）.

項　目 (N_1=39)	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E／C
(5) 大いに理解したい	16	18	2	12．5
(4) やや　理解したい	17	20	3	17．6
(3) どちらでもない	6	1	－5	－83．3
(2) さほど理解したくない	0	0	0	0．0
(1) 全く理解したくない	0	0	0	0．0
Mean	4．26	4．44	．18	4．2

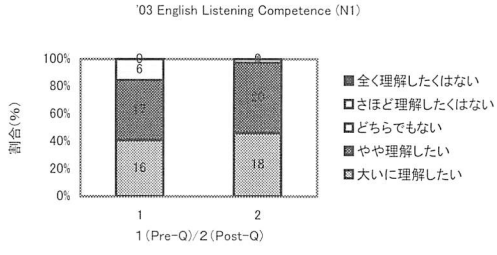


図8a

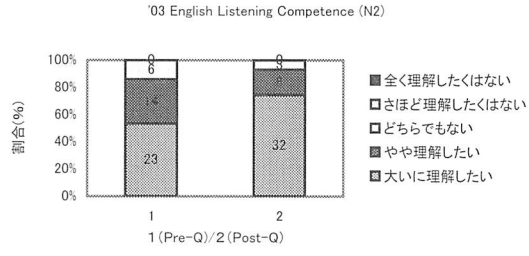


図8b

表13　8（1）.

項　目 (N_2=43)	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E／C
(5) 大いに理解したい	23	32	9	39．1
(4) やや　理解したい	14	8	－6	－42．8
(3) どちらでもない	6	3	—3	－50．0

（2）さほど理解したくない	0	0	0	0．0
（1）全く理解したくない	0	0	0	0．0
Mean	4．40	4．67	．23	5．2

表14（参考）「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)
7（1）．

項　目（N＝35）	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E ／ C
（5）大いに理解したい	23	28	5	21．7
（4）やや　理解したい	9	6	－3	－33．3
（3）どちらでもない	3	1	－2	－66．7
（2）さほど理解したくない	0	0	0	0．0
（1）全く理解したくない	0	0	0	0．0
Mean	4．57	4．77	．20	4．4

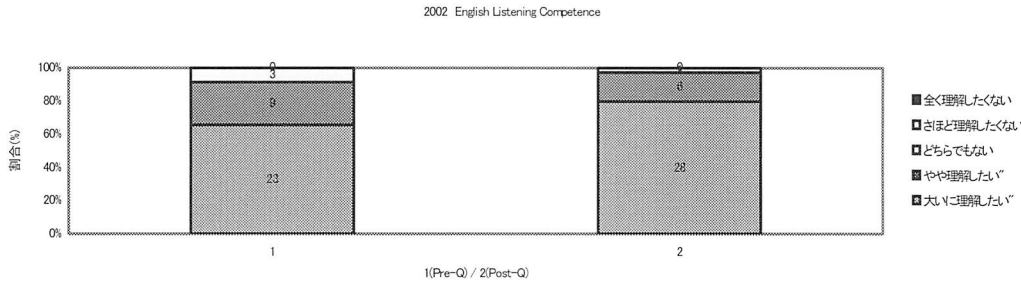


図8

表15　8（2）

項　目(N1＝39)	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E ／ C
（5）大いに話せるように	16	21	5	31．3
（4）やや　話せるように	11	13	2	18．2
（3）どちらでもない	11	4	－7	－63．6
（2）さほど話せなくてよい	1	1	0	0．0
（1）全く話せなくてよい	0	0	0	0．0
Mean	4．08	4．38	．30	7．4

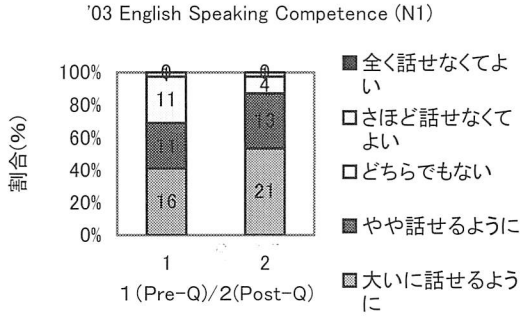


図9a

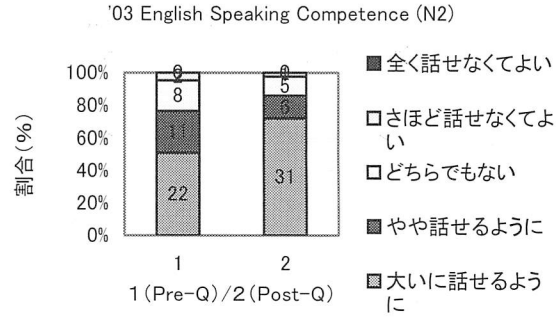


図9b

表16　8（2）.

項　目(N_2=43)	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E ／ C
（5）大いに話せるように	22	31	9	40.9
（4）やや　話せるように	11	6	－5	－45.4
（3）どちらでもない	8	5	－3	－37.5
（2）さほど話せなくてよい	2	1	－1	－50.0
（1）全く話せなくてよい	0	0	0	0.0
Mean	4.23	4.56	.23	5.4

表17　(参考)「CALL&PRESENTATION」調査結果(2002)
7（2）.

項　目（N＝35）	Pre-Q 人数（人）C	Pre-Q 人数（人）D	D－C E	対比率（%）(pt.) E ／ C
（5）大いに話せるように	23	28	5	21.7
（4）やや　話せるように	7	7	0	0.0
（3）どちらでもない	5	0	－5	－100.0
（2）さほど話せなくてよい	0	0	0	0.0
（1）全く話せなくてよい	0	0	0	0.0
Mean	4.51	4.80	.29	6.4

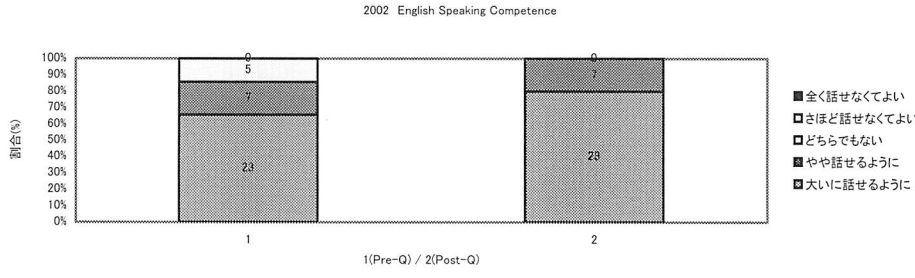


図9

8．結果の分析

1についてはコンピューター所有者のみを対象とした「授業以前のインターネットによる主たる検索」という内容でのPre-Questionnaireを実施した。N1においては、1）「ニュース関連」が13%に対して、2）「趣味・娯楽」が48%と群を抜いていた。以下3）「ゲーム」が11%、4）「スポーツ」が11%、5）「音楽」が14%であった。

一方N2においては、1）「ニュース関連」が11%に対して、2）「趣味・娯楽」が45%とこれもN1と同様に群を抜いていた。以下3）「ゲーム」が11%、4）「スポーツ」が7%、5）「音楽」が19%であった。

2についてはインターネット検索者のみを対象として「今回の授業での必要なインターネットでの検索時間」を調査した。N1における回答は1）TIME 1　がMean　.5 時間、2）TIME 2が1.75時間、3）NEWSWEEK 1　で1.25 時間、4）NEWSWEEK　2が .75 時間、5）MACLEAN'S 1 が1.0 時間、6）MACLEAN'S 2 も1.0 時間であった。最長では 2）TIME 2, 5）MACLEAN'S 1, 6）MACLEAN'S　2の2.0時間、最短では, 1）TIME 1, 3）NEWSWEEK 1, 5）MACLEAN'S 1の .5時間であった。

一方、N2における回答は1）TIME 1　がMean2.25 時間、2）TIME 2が1.25時間、3）NEWSWEEK 1　で1.5 時間、4）NEWSWEEK　2が1.0 時間、5）MACLEAN'S 1 が1.75 時間、6）MACLEAN'S 2 が2.3 時間であった。最長では 1）TIME 1の4.0時間、最短では, 2）TIME 2, 4）NEWSWEEK 2, 6）MACLEAN'S 2の0.5時間であった。集団と

しての平均検索時間はN1で .91時間、N2では1.43時間であった。

３については、「今回の授業以後に検索してみたいインターネット種別」という内容の調査をコンピューターの所有者と非所有者別にPost- Questionnaire 形式として取り入れた。すなわち１の調査項目との事前事後といった比較対象の調査となっている。

その結果、コンピューター所有者に関しては、N1においては、１）「ニュース関連」が44%と全体の半数弱を占め、１、との調査比では31%もの増加を見せた。一方、２）「趣味・娯楽」は１．の調査とは変わって第２位の42%に下がり、Pre-Qとの比較では32%と16%もの減少を示した。３）「ゲーム」は6%と5%の減少、４）「スポーツ」は6%と5%の減少、５）「音楽」は9% と４）と同様に5%の減少を示した。

N2においては、１）「ニュース関連」が33%と全体の3分の1を占め、１、との調査比では22%もの増加を見せた。一方、２）「趣味・娯楽」は１．の調査と変わらず第1位の37%を占めたとはいえ、Pre-Qとの比較では45%と8%の減少を示した。３）「ゲーム」は4%と7%の減少、４）「スポーツ」は7%と変わらず、５）「音楽」は15% と、１）同様に4%の増加を示した。

一方、コンピューター非所有者に関してはPost-Qでの扱いで調査を行なっており、N1については、１）「ニュース関連」が40%と圧倒的な数値をあげ、また、２）「趣味・娯楽」はその半分の20%、３）「ゲーム」は２）同様に20%、４）「スポーツ」は皆無、５）「音楽」は20%という数値になった。

また、N2については、１）「ニュース関連」が18%と5分の1弱の数値をあげたのに対して、２）「趣味・娯楽」は24%と第1位を占め、３）「ゲーム」は13%、４）「スポーツ」は３）同様に13%、５）「音楽」は19%という数値になった。

2002年度に類似調査を行なった数値との比較を「参考」として掲げた。これは高校1年生を対象に行なった「授業前後におけるインターネット活用種別」の調査（山西,2002） であるが、この時、コンピューター所有者に対して行なった同じ分類にしたPre-Qとしては、１）「ニュース関連」が5%に対して ２）「趣味・娯楽」が58%と第1位を占め、３）「ゲーム」が21%と第2位となり、以下４）「スポーツ」11%、５）「音楽」5%、そして６）「その他」が.1%となった。

更に同じ者がCALL実践を体験して行なわれたPost-Qにおいて、コンピューター所有者、非所有者を対象に調査を行なった所、コンピューター所有者に関しては、１）「ニュース関連」が33%と全体の約3分の１を占め、１、との調査比では28%もの増加を見せた。一方、２）「趣味・娯楽」は１．の調査と変わらず第1位の42%を占めたとはいえ、Pre-Qとの比較では16%もの減少を示した。３）「ゲーム」は5%と16%の減少、４）「スポーツ」は10%と微減であった。

一方、コンピューター非所有者に関しては１）「ニュース関連」が29%、また、２）「趣味・娯楽」も同率の29%と双方に第1位を示し、圧倒的な数値を上げた。以下３）「ゲーム」と４）「スポーツ」はこれも共に同率の7%を占めたのに対し、５）「音楽」と ６）「その他」には14%という数値で、pre-Qでは5%、0%、また、Post-Qのコンピューター所有者では10%，0%であったものとは対照的に大きな数値を上げた。

４．と５．については「SARS関連についてEnglish Presentation授業を行なうということについて」の「最初(Pre-Q)」と「最後(Post-Q)」の印象、感想を調査した。その結果、N1においては１）「とても難しそう」がPre-QとPost-Qではそれぞれ33.3%－17.9%とおよそ半減、反面２）「やや難しそう」と答えた者は35.8%－46.2%と約10%増加という数値が出た。３）の「どちらでもない」は15.3%－12.8%と微減となり、４）「やや楽しそう」は5.1 %—7.7%と微増、５）「かなり易しそう」は10.3%－15.4%と若干増加した。Meanはそれぞれ2.23とPre-Qでは「難しそう」に傾いていた印象が、Post-Qでは2.56と微増に留まった。

一方、N2においては１）「とても難しそう」がPre-QとPost-Qではそれぞれ46.5%－14.0%とおよそ3分の１以下に激減した反面、２）「やや難しそう」と答えた者は30.2%－34.9%と微増という数値が出た。３）の「どちらでもない」は7.0%－14.0%と倍増、４）「やや楽しそう」は2.3 %—7.0%と3倍増、５）「かなり易しそう」は14.0%－30.2%とこれも倍増した。Meanは2.07とPre-Qでは「やや難しそう」に傾いていた印象が、Post-Qでは3.05と中間的な意見に移動していった。

類似の実践調査としては、2002年度にテーマを「教科」別としたEnglish Presentation （山西,2002） を行ない、そこで同様のPre- QとPost-Qで意識調査を行なった。その結果、１）「かなり難しそう」２）「やや難しそう」と答えた者がPre-QとPost-Qではそれぞれ17%－14%、43%－40%と微減の数値が出たくらいであったが、３）の「どちらでもない」

が18%－6%と大幅減となり、４）「やや楽しそう」という半ば曖昧な質問項目よりも５）「かなり易しそう」に回答が集中し、23%－40%と大幅増となった。Meanはそれぞれ2.69-3.11とPre-Qでは「難しそう」に傾いていた印象も、Post-Qでは「楽しそう・易しそう」の側に0.42傾いていった。

６．については「題名や作成資料についての第1次印象（１）」と「実際にPresentationを行なった後のgap（２）」についての調査である。N1において、（１）－（２）の対比でそれぞれ１）「TIME1」は12.8%－12.8%、２）「TIME2」は10.3%－12.8%、３）「NEWSWEEK 1」は15.4%－10.3%、４）「NEWSWEEK 2」は43.6%－7.7%、５）「MACLEAN'S 1」は2.6%－2.6%、６）「MACLEAN'S 2」は15.4 %－53.8 %と、６）は大幅増加があった反面、１）、５）は変化がなく、２）は微増、３）は微減、そして４）は大幅減少となった。

一方、N2では、（１）－（２）の対比ではそれぞれ１）「TIME1」は34.9%－46.5%、２）「TIME2」は9.3%－9.3%、３）「NEWSWEEK 1」は20.9%－18.6%、４）「NEWSWEEK 2」は18.6%－14.0%、５）「MACLEAN'S 1」は9.3%－4.7%、６）「MACLEAN'S 2」は7.0 %－14.0 %と、１）はある程度大きな増加があった反面、２）、５）は変化がなく、５）は半減、３）、４）は微減、そして６）は倍増となった。

この調査との比較対照になるものは2002年度の 同様の調査である。（１）－（２）の対比でそれぞれ１）「Gold Coast」は14%－0%、２）「Aborigines」は17%－23%、３）「Fame」ははは9%－0%、４）「All Blacks」は29%－40%、５）「Maoris」は31%－34%、６）「Flag」は0%－3%と、２）と３）は大幅増加があり、５、６）は微増の反面、１）と３）は大幅減少となった。

７．については「英語でのPresentation」を行なうことにより（１）「今後、より英語を理解できるようになりたい」（Improvement for Listening Comprehension）、（２）「今後、より英語を話せるようになりたい」（Improvement for Speaking Competence ）という学習・実践からの応用上達度欲求に関する調査をpre-Q, Post-Qで行なったものである。

（１）について5ptを最大値として調査した結果、N1においては、（５）「大いに理解したい」が41.0%-46.1%，（４）「やや理解したい」が43.6%－51.3%という数値になり、５，４ptで全体の84.7%－97.4%を占めた、他方、（３）「どちらでもない」は15.4%－2.6%と激減し、（２）「さほど理解したくない」と（１）「全く理解したくない」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．２６―４．４４という数値になり、関心度合いのかなりの高さが伺えた。

かたやN2においては、（５）「大いに理解したい」が53.4%-74.4%，（４）「やや理解したい」が32.6%－18.6%という数値になり、５，４ptで全体の86.0%－93.0%を占めた、他方、（３）「どちらでもない」は14.0%－7.0%と半減し、（２）「さほど理解したくない」と（１）「全く理解したくない」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．４０―４．６７という数値になり、これもまた関心度合いに関してかなりの高さが伺えた。

７（２）では、N1においては、（５）「大いに話せるように」が41.0%－53.8%、（４）「やや話せるように」は28.2%-33.3%と、双方で69.2%－87.1%を占めたのに対し、（３）「どちらでもない」は28.2%-10.3%と大幅に減少し、（２）「さほど話せなくてよい」は2.6%-2.6%、（１）「全く話せなくてよい」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．０８―４．３８という数値になり、こちらも関心度合いがかなり高いことが伺えた。

一方N2においては、（５）「大いに話せるように」が51.1%－72.0%、（４）「やや話せるように」は25.6%-14.0%と、双方で76.7%－86.0%を占めたのに対し、（３）「どちらでもない」は18.6%-11.6%と大幅に減少し、（２）「さほど話せなくてよい」は4.7%-2.3%、（１）「全く話せなくてよい」はこちらもPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．２３―４．５６という数値になり、こちらも同様に関心度合いがかなり高いことが伺えた。

参考資料としての比較対照は，2002年度のEnglish Presentation Dataの際に調査した項目である。今年度と同様に「英語でのPresentation」を行なうことにより（１）「今後、より英語を理解できるようになりたい」（Improvement for Listening Comprehension）、（２）「今後、より英語を話せるようになりたい」（Improvement for Speaking Competence ）という学習・実践からの応用上達度欲求に関する調査をpre-Q, Post-Qで行なったものである。

5ptを最大値として調査した結果、（５）「大いに理解したい」が66%-80%，（４）「やや理解したい」が26%－17%という数値になり、５，４ptで全体の92%－97%を占めた、他方、（３）「どちらでもない」は9%－3%と減少し、（２）「さほど理解したくない」と（１）「全く理解したくない」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．５７―４．７７という数値になり、関心度合いのかなりの高さが伺えた。

７（２）では、（５）「大いに話せるように」が66%－80%、（４）「やや話せるように」は20%-20%であったの

に対し、（3）「どちらでもない」は14%-0%と大幅に減少し、（2）「さほど話せなくてよい」と（1）「全く話せなくてよい」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ４．５１—４．８０という数値になり、こちらも関心度合いがかなり高いことが伺えた。

９．考察

３．「研究仮説の設定」では以下の５つの研究仮説を立案した。

1）コンピューター・インターネットに対する関心の度合いは、PRESENTATION に対する準備の度合いに比例する。
2）コンピューター所有していない学生がその後自分でコンピューターを操作するような時には、授業で取り上げたような社会・時事問題に関心を示す。
3）PRESENTATION に関する興味・関心は、導入の仕方によって変化する。
4）英語で説明する仕方次第では、事前の作成資料のできばえに対する評価と、その後の発表のできばえに対する評価が変化する。
5）英語で自分の意見が発表できるようになる意欲や英語を理解できるようになりたいという知識欲は、学生相互の取り組みによって変化する。

これらに対して検証を重ねながらその是非を述べていく。

１については「授業以前のインターネットによる主たる検索」という内容をPre- Questionnaireとしてコンピューター所有者のみを対象として調査した。被験者が高専３年生ではあるものの、インターネットは通常自分の日常生活の活動範囲内で用いる事が多いため，図１a及び１b より２）「趣味・娯楽」がN1,N2ともそれぞれ48%、45%と他より群を抜いて第１位になることは当然であると考えられる。すなわち，自分の興味や関心のある事柄をインターネットを用いて検索してみたいというのはネットサーフィンの基本的な入り方であろう。以下N1,N2とも３）「ゲーム」が11%、４）「スポーツ」ではN1が11%,N2が7%であることも１）と同様に自分の興味や関心といった内容に含まれるので予測しうる事と考えられる。１）の「ニュース関連」に関する検索がN1では13%、N2でも11%はいた，すなわちおよそ10人に1人強はいたという割合は，むしろ社会事象に調査を行なう以前から関心を抱いていたということで、時事に関心を持つ学生がいるという証明にもなることがわかった。

２についてはインターネット検索者のみを対象として「今回の授業での必要なインターネットでの検索時間」を調査した。それぞれの担当テーマにより検索、調査にかかる時間に違いが出た。最短ではN1,N2とも .5時間であった反面、最長はN1で2時間、N2では4時間もかかっていた。SARS関連のニュースは世界情勢の変化に刻一刻と情報も更新される為に、その時勢に追いついていくことがなかなか難しくなっていた。そういったことから情報検索にも伴って時間のかかる作業になったのであろうと推察される。加えて、全ての出来事は外国で起こっていたために、日本のインターネットにおける新聞情報からというよりも、外国のメディアにアクセスして情報を入手すると行った手法を取らなければならなかった為に、必要以上に時間が取られたということも考えられる。

３については、「今回の授業以後に検索してみたいインターネット種別」という内容の調査をコンピューターの所有者と非所有者別にPost- Questionnaire 形式として取り入れた。すなわち１の調査項目との事前事後といった比較対象の調査となっている。

その結果、N1においてコンピューター所有者に関しては、図２a より１）「ニュース関連」が44%と全体の約半数弱を占め、１．との調査比では31%もの増加を見せた。これは授業によって関心を示した被験者がコンピューターの利用方法を単なる自分の興味や関心を導くためのいわゆる「遊びとしての道具」から，時事問題など世の中の動向に直結している「情報をいながらにして入手していくための非常に便利なツール」であるという意識へ移り変わっていったと読み取ることができる。反面、２）「趣味・娯楽」は１．の調査とはうって変わって第２位の位置に落ち、32%にまで落ち込んだ。すなわちPre-Qとの比較では16%もの減少を示した。３）「ゲーム」は6%と5%の減少、４）「スポーツ」も３）と同様に6%と5%の減少をみせ、５）「音楽」では9%と5%の減少を示した。これらの現象も上記での分析と同様に２）から５）までの合計減少割合はおよそ31%であったのに対して，１）での増加割合が同じく31%であったという

ことから，これら２）から５）を検索してきた者達の意識が１）の方向に向いていったと推察することができる。

一方、Ｎ２においてのコンピューター所有者に関しては、図２ｃより１）「ニュース関連」が33％と全体の約3分の1を占め、１．との調査比では22％と3倍もの増加を見せた。これもN1と同様に、時事問題に関心を示した被験者が、コンピューターの利用方法を単なる自分の興味や関心を導くためのいわゆる「遊びとしての道具」から、時事問題など世の中の動向に直結している「情報をいながらにして入手していくための非常に便利なツール」であるという意識へ移り変わっていったと読み取ることができる。反面、２）「趣味・娯楽」はN1同様に１．の調査とはうって変わって第２位の位置に落ち、37％にまで落ち込んだ。すなわちPre-Qとの比較では8％の減少を示した。３）「ゲーム」は4％と11％の減少を示し、４）「スポーツ」は7％から変わらず、５）「音楽」では15％と逆に6％の増加を示した。これらの現象も上記での分析と同様に２）、３）の合計減少割合はおよそ19％であったのに対して，１）での増加割合は22％であった。ということから，これら２）、３）を検索してきた者達の意識が１）の方向に向いていったと推察することができる。

N1と状況が異なるのが５）の数値の増加である。「娯楽」と「音楽」は類似した内容になるものの、「音楽」だけが突出するのは大変興味深い現象である。N2は機械工学に所属する学生であり、コンピューターを所有しながらもN1の情報工学所属学生のように必ずしもコンピューターに精通している者が多いわけではないことから、改めてその「ツール」を身近な所で扱ってみたいという意識の表れと考えることができる。それがこの要因の一つとも考えられる。

一方、コンピューター非所有者に関してはN1においては、図２bより１）「ニュース関連」が40％と非常に高い数値を出し、２）「趣味・娯楽」は３）「ゲーム」、５）「音楽」と同様に20％という数値をあげた。これはコンピューターを現在所有していなくとも、自分が現在もしくは将来的にコンピューターを所有できたとしたら、授業で学んだ時と同様に自らすすんで「ニュース関連」の時事事象をコンピューターを用いて検索してみたいという意識の向上であると読み取ることができる。以下」４）「スポーツ」については皆無となっていたことが特筆される。これは今コンピューターを所有していないからこそ、今後コンピューターを所有した暁には自分の興味や関心の元に「娯楽的なもの」（すなわち２）や３），４），５））を検索してみたいという，現在のコンピューター所有者が先に歩んできた道のりを追随する形（ネットサーフィンの導入）になっていると捉えることができる。

他方、N2においては、図２dより１）「ニュース関連」が18％という数値を出した一方、２）「趣味・娯楽」は24％、３）「ゲーム」、４）「スポーツ」は同率で13％、５）「音楽」は19％という数値をあげた。これはコンピューターを現在所有していなくとも、自分が今、もしくは将来的にコンピューターを所有できたとしたら、授業で学んだ時と同様に自らすすんで「ニュース関連」の時事事象をコンピューターを用いて検索してみたいと思うよりも前に、コンピューター所有者の調査同様に身近な観点からコンピューターに触れてみたいという意識の表れであると読み取ることができる。ここにも所属学科間における学生が抱く意識の違いを読み取ることができる。

これらの分析を追認する形として、2002年度に類似調査を行なった数値との比較を「参考」として掲げた。これは高校１年生を対象に行なった「授業前後におけるインターネット活用種別」の調査（山西,2002）であるが、この時、コンピューター所有者に対して行なった同じ分類にしたPre-Qとしては、図３より１）「ニュース関連」が5％に対して　２）「趣味・娯楽」が51％と第1位を占め、３）「ゲーム」が19％と第2位となり、以下４）「スポーツ」10％、５）「音楽」10％、そして６）「その他」が5％となった。２）が第1位、３）が第2位でありその総計割合が70％であるという結果は2002年度のPre-Qとの比較調査の結果から見ると、2002年度のそれはN1:61％,N2: 56％となり数値的には少々少ないものの、「ニュース関連」と「趣味・娯楽」に対する関心はほぼ同様の傾向が見られると言うことができる。１）の「ニュース関連」も2001年度は5％，2002年度も5％であったことから、事前に時事事象に関心があった者はこれもほぼ同数の結果であると読み取ることができる。

更に2002年度の調査におけるPost-Qにおいて、コンピューター非所有者を対象に調査を行なった結果としては図４aよりN1（コンピューター所有者）においては、１）「ニュース関連」は33％に対して、２）「趣味・娯楽」は42％と高い値を出した。これはコンピューターを既に所有している者であっても、高校1年生という年齢上、まだまだ自分の身の回りの関心事に興味を抱くのは至極当然のことである反面、１）「ニュース関連」は33％と全体の約3分の１を占め、１．との調査比では28％もの増加を見せた。これは授業によって関心を示した被験者がコンピューターの利用方法を単なる自分の興味や関心を導くためのいわゆる「遊びとしての道具」から、時事問題など世の中の動向に直結している「情報をいながらにして入手していくための非常に便利なツール」であるという意識へ移り変わっていったと読み取ることができる。他方、２）「趣味・娯楽」は１．の調査と変わらず第1位の42％を占めたとはいえ、Pre-Qとの比較では16％もの減少を示した。３）「ゲーム」は5％と16％の減少、４）「スポーツ」は10％と微減であった。これらの現象

も上記での分析と同様に２）と３）の合計減少割合はおよそ32%であったのに対して、１）での増加割合が28%であったということから、これら２）と３）を検索してきた者達の意識が１）の方向に向いていったと推察することができる。

同様に、N2（コンピューター非所有者）に関しては図４bより１）「ニュース関連」が29%と高い数値を出し、２）「趣味・娯楽」も同率の29%と双方に第1位を示し、圧倒的な数値を上げた。これはコンピューターを現在所有していなくとも，自分が今，もしくは将来的にコンピューターを所有できたとしたら、授業で学んだ時と同様に自らすすんで「ニュース関連」の時事事象をコンピューターを用いて検索してみたいという意識の向上であると読み取ることができる。以下３）「ゲーム」と４）「スポーツ」はこれも共に同率の7%を占めたのに対し、５）「音楽」と ６）「その他」には14%という数値で、pre-Qでは5%、0%、また、Post-Qのコンピューター所有者では10%，0%であったものとは対照的に大きな数値を上げた。これは今コンピューターを所有していないからこそ、今後コンピューターを所有した暁には自分の興味や関心の元に「娯楽的なもの」（すなわち２）や３），４），５））を検索してみたいという，現在のコンピューター所有者が先に歩んできた道のりを追随する形（ネットサーフィンの導入）になっていると捉えることができる。

以上の分析から、研究仮説の１．で立てた「PRESENTATION に関する興味・関心は、導入の仕方によって変化する」、更に仮説２．で立てた「コンピューターを所有していない生徒がその後自分でコンピューターを操作するような時には、授業で取り上げたような社会・時事問題に関心を示す」という双方の考え方は、ある程度は正当であることが立証された。

４．と５．については「SARS関連によるEnglish Presentation授業を行なうということについて」の「受講前(Pre-Q)」と受講後(Post-Q)」の印象、感想を調査した。この調査から被験者の意識は当初から「（とても・やや）難しそう」といった印象を大きく持っていたと言うことができる。すなわち、図５aよりN1については、１）２）に関しては事前事後では「とても難しそう」がおよそ半減したのに対し、「やや難しそう」は28.6%もの数値を上げており、結果として「難しい」という感想は69%から64%へと5%ほど値を下げた。その印象が「（とても・やや）楽しそう」の15%-23%の8%増加へとつながっている。このことからわずかではあっても当初の「難しそう」と思っていたこの内容も、実際に行ってみると「楽しそう」という印象へと変わっていったということができる。

同様にN2においては、図５bより「（とても・やや）難しそう」といった印象がPre-QとPost-Qでは77%－49%へと大幅に値を下げ、その数値の変化が16%—37%へと実に21%も上昇させた。これもN1の分析同様に、当初の「難しそう」と思っていたこの内容も、実際に行ってみると「楽しそう」という印象へと変わっていったということができる。

類似の先行調査としては、2002年度にテーマを「教科」別としたEnglish Presentation を行ない、そこで同様のPre- QとPost-Qで意識調査（山西,2002）を行なったものがある。これも2003年度の調査とその結果をほぼ同じくしている。すなわち、図６より１）２）に関しては事前事後では大きな変化がみられてはいない反面、３）という保留の意識が大きく減り，代わりに４）５），とりわけ５）に回答が集中したことからも伺える。これはPresentationを行なう前に「難しそう」であると最初から後込みするような意識で臨んでいた者は、実際に行った後であってもその意識を大きく変えるまでには至らなかった。すなわち難しさは予想通りであったと被験者が考えているのに対して、意見としてはどちらつかずであった者達の意識が、実際にPresentation を行ってみたら当初考えていたよりも「易し」く、また「楽し」かったという感想へと変化していったと考えることができる。その証拠にPre-Qの時点でも、またPost-Qの時点であっても４）に対する回答が皆無であったということから、被験者の意識は前述のように最初から大きく分かれ、その意識には大きな変化が見られなかったと分析することができる。

これらの分析から研究仮説の３．で立てた「PRESENTATION に関する興味・関心は、導入の仕方によって変化する」という考え方も仮説１．２同様に正当であることが立証された。

６．については「題名や作成資料についての第1次印象（１）」と「実際にPresentationを行なった後のgap（２）」についての調査である。この調査の結果からは、図６aよりN1においてはNEWSWEEK2のグループが第1次印象と実際に行われたPresentationの感想とでは43%から8%へと大きくその数値を下げ、代わりにMACLEAN'S２のグループに15%から54%へとほぼ同率の動きを示した。これはいかに事前の準備ができていようとも、実際にその資料に対して真剣な取り組みを示さなければ受け手の評価は大きく下がるといった結果を招いていることがわかる。

同様にN2においては、図６bよりTIME1及びMACLEAN'S２のグループの事後評価が高く、反面NEWSWEEK２とMACLEAN'S１の評価が若干下回っていることが判明した。これも先程同様にいかに事前の準備ができていて最初に高

い評価を受けていようとも、実際にその資料に対して真剣な取り組みを示し、綿密なPresentationの準備をしなければ、受け手の評価は大きく下がるといった結果を招いていることがわかる。

この調査との比較対照になるものは2002年度のEnglish Presentation Data（山西,2000）である。豪州とニュージーランドを大きなテーマとして掲げ、それらの詳細な発表内容については各集団に一任されてある、ただし資料作成の媒介としては極力インターネットを用いる事とするといったCALLを行なった。この時には，図７のようにGold CoastとFameがその数値を大きく減らしたのに対し、All Blacksは大幅な増加を見せた。検索したインターネット資料は以下のとおりである。

表18

インターネット活用資料

AUSTRALIA

＜Gold Coast班＞　・The History of Gold Coast
・Weather on the Gold Coast, Australia
・Sport on The Gold Coast
http://www.reflections. com. au/Gold Coast/

＜Aborigines 班＞　・Aborigines The First Australians
http://www.ozrap.net.au/～senani/aborigin.htm

＜General Australia 班＞
・Famous Names in Australia-- Movie Stars, Sportsmen
http://movies.yahoo.com/shop?d=hc&id=1800019113&cf=biog&intl=ushttp://www.weirdchiefpictures.com/mel.gibson.htm

NEW ZEALAND

＜Rugby 班＞　・All Blacks
http://www.nzrugby.com

＜Maori 班＞　・The Maoris: The History of Maoris & The Languages of Maoris
http://www.helsinki.fi/ ～ksiazkie/babel/maori/index.html

＜General New Zealand 班＞
・The History of the New Zealand Flag
http://www.mch.govt.nz/nzflag/history.htm

Gold Coast とGeneral Australia は（１）での第１次印象が（２）でのPresentation実施後の時と大幅に変化し，全く評価されない状態になってしまっていることがわかる。他方，この２つのインターネットによる調査時間を対比してみると，Gold Coast については表６より平均1.0時間であった。しかしながら、３）については平均3．0時間という長時間を要している。これはいかに時間をかけてもその調査の多様さとタイトルが「オーストラリアの有名人」ということから、検索項目としては漠然としすぎており、更にその検索をより詳細に絞る上で「俳優」にするのか「歌手」にするのかというようなジャンルを決めておかなければ必要以上に時間がかかってしまったという事情も読みとることができる。更に追跡口頭調査では，この班は事前の打ち合わせがままならずにCooperative Learningがさほど機能していなかったということも挙げられていた。これらの後手後手の対応が作成資料の不出来と（２）のPresentation後にも関わらず評価が全くなかったという結末を生み出してしまった事が読み取れる。

反面、４）と５）は当初から約30%台という印象の強さを誇り、Presentation実施後もその評価は増加している。２）に関しても（１）の段階では約2割の者が関心を示し、Presentation実施後は6%の上昇を見せている。これらのインターネットによる調査、検索時間は４）が1.5時間、５）は1.0時間、２）は1.7時間であった。５）に関しては１）のGold Coastとそう変わりはないものの、それぞれの分担班の検索時間を詳細に見ると、１）は1.5時間と0.5時間に対して５）は双方とも1.0時間であった。これは平均調査時間としては同じであるものの、0.5時間という検索時間では情報量としてはやや物足りない感が否めない。反面５）の双方とも1.0時間というのは情報量がそれなりに豊富であり、更に１）はPresentationの際に作成資料を基にしての淡々とした説明に終始したのに対し、５）はMaori族の紹介や民族の生活に関

する解説をしたのみならず、実際にMaori語講座をもうけて、現地でもすぐ使えるような日常会話のskit(寸劇)を交えて聴衆にわかりやすいPresentationを行ったことも、評価を大きく変えた要因となるであろう。実際に「作成資料についての興味」という（1）の段階でも、その出来映えだけの評価でも2）は14%であるのに対し、5）は31%とほぼ3人に1人の関心を集めていたことからも、準備段階から評価の高さを集めていたことが伺える。同様に4）に関しては，被験者達は学校の授業の中でラグビーを6年間行なっている（北嶺中高等学校,2001）ことからラグビー競技に関心が高いことが背景にある。その関心の高さが（1）において29%という高い興味を引き出し、更にPresentation時にはAll Blacksの実際の戦い前の意識高揚の踊りを披露したために、観衆にも強烈な印象を与え、資料の活用の仕方と相まって（2）においては40%という更に高い評価を得られた。インターネットによる検索調査時間も表2より双方とも1.5時間というかなり時間をかけた調査のために、資料も充実していたということができる。

これらを通して原稿として全般的に言えることは、発表用の資料が作成された時には目でその資料の内容を追うために視覚に訴えるものができていれば必然的に観客（学生・生徒）は興味を抱くことになる。そこで「Presentation」を聞くのだが、発表の仕方が作成資料に基づいて理路整然としていれば理解度も増して「上手である」という印象を抱くことができるが、反面、資料の完成度合いは高くとも発表の仕方がただ字面を追った話し方であったり、その声が小さかったり、また、目線が下を向いてばかりで聴衆に訴えるような説明の仕方でなかったりすると、聞いている側は内容があまり理解できなくなってしまい、必然的に「内容が理解できるように話してくれてはいない」、すなわち「上手ではない」という印象を持ってしまうのである。他方、資料が稚拙であっても、説明の仕方がしっかりとしているとこの評価は逆に高まる。要は「作成した内容の濃い資料を元にして、いかにその内容に基づいたPresentationを推し進めていけるか」がこの評価の別れ目となるであろう。すなわち「Presentation」とは視覚に訴える資料だけではなく、聞いていても容易に理解できる「説明の仕方（eye contact 等も含めた）」が重要な要素となるのである。

以上の分析から仮説4．で立てた「英語で説明する仕方次第では、事前の作成資料のできばえに対する評価と、その後の発表のできばえに対する評価が変化する」は正当であったと言うことができる。

8（1）については「英語でのPresentation」を行なうことにより（1）「今後、より英語を理解できるようになりたい」（Improvement for Listening Comprehension）、（2）「今後、より英語を話せるようになりたい」（Improvement for Speaking Competence ）という学習・実践からの応用上達度欲求に関する調査をpre-Q, Post-Qで行なった。

英語を過去に6年間学んできた高専生が「英語を理解したい」と思うのは当然のことではあるが、このPresentation前後に取った意識調査の中では，N1については図8aのように「(大いに・やや)理解したい」と考える者が前後で30%の上昇率を示し、保留の回答者が皆無になった事が特筆される。とりわけ実施以後にこのような高まりを示したということは、発表者が英語で述べている事柄をしっかりと理解していきたいという意欲の現れであるということが示されている。

同様にN2においては、図8bより、「大いに理解したい」と考える者が39%もの上昇率を出した。これは「やや理解したい」と「保留」意見がそっくり移動した数値の結果であると見ることができることから、先程同様に
発表者が英語で述べている事柄をしっかりと理解していきたいという意欲の現れであるということが示されている。
参考資料としての比較対照は、2002年度の豪州・ニュージーランド別　English Presentation Dataの際に調査した項目(山西，2002)である。

英語を過去に4年間学んできた高校生が「英語を理解したい」と思うのは当然のことではあるが，このPresentation前後に取った意識調査の中では，図8のように（4）というのではなく，（5）の意識を持つ者の評価が66%から80%に増えたというのは特筆すべき事であろう。（3）の意識を持つ者がほぼいなくなり，更に（4）も減少し，代わりに（5）の増加が見られたというのは，それだけ「英語を理解したい」と思う強い意識の変革の表れであると読み取ることができる。平均値も4.57から4.77への上昇というのもそれらを印象づけている。英語学習者は英語を「大いに理解したい」のである。

8（2）では、N1については図9aのように（5）「大いに話せるように」が41%－54%、（4）「やや話せるように」は28%-33%であったのに対し、（3）「どちらでもない」は28%-10%と大幅に減少し、（2）「さほど話せなくてよい」と（1）「全く話せなくてよい」はPre-Q, Post-Qともほぼ0%となった。Meanはそれぞれ4.08-4.38という数値になり、こちらも関心度合いがかなり高いことが伺えた。

ここでも（5）の意識を持つ者の評価が大きく増えていることが特徴づけられている。特に数値の推移で言えば，（3）の意識を抱いていた者がそっくりそのまま（5）に移行していったと言うことができる。

同様にN2においては、図9bのように（5）「大いに話せるように」が51%－72%と上昇し、反面（4）「やや話せるように」は26%-14%とおよそ半減したのに対し、（3）「どちらでもない」は19%-12%と減少し、（2）「さほど話せなくてよい」と（1）「全く話せなくてよい」はPre-Q, Post-Qともこれもほぼ0%となった。Meanはそれぞれ4.23-4.56という数値になり、こちらも関心度合いがかなり高いことが伺えた。

英語を「理解したい」だけではなく「話せるようにもなりたい」と強く思うのは，やはりこういったPresentationのような英語を用いて実際に自分たちが調査した内容を聴衆にわかりやすいように説明し，理解してもらうといった「発信型」のコミュニケーションを行ないたいという被験者の意識変革の表れが数値となって如実に現れている。そして、ここでも（5）の意識を持つ者の評価が大きく増えていることが特徴づけられている。特に数値の推移で言えば，（4）、（3）の意識を抱いていた者がそっくりそのまま（5）に移行していったと言うことができる。

英語を「理解したい」だけではなく「話せるようにもなりたい」と強く思うのは，やはりこういったPresentationのような英語を用いて実際に自分たちが調査した内容を聴衆にわかりやすいように説明し，理解してもらうといった「発信型」のコミュニケーションを行ないたいという被験者の意識変革の表れが数値となって如実に現れている。

参考資料としての比較対照は、2002年度の豪州・ニュージーランド別　English Presentation Dataの際に調査した項目(山西，2002)である。

（5）「大いに話せるように」が66%－80%、（4）「やや話せるように」は20%-20%であったのに対し、（3）「どちらでもない」は14%-0%と大幅に減少し、（2）「さほど話せなくてよい」と（1）「全く話せなくてよい」はPre-Q, Post-Qとも0%であった。Meanはそれぞれ4.51-4.80という数値になり、こちらも関心度合いがかなり高いことが伺えた。

ここでも（5）の意識を持つ者の評価が大きく増えていることが特徴づけられている。特に数値の推移で言えば，（3）の意識を抱いていた者がそっくりそのまま（5）に移行していったと言うことができる。

これらの分析から仮説5．で立てた「英語で自分の意見が発表できるようになる意欲や英語を理解できるようになりたいという知識欲は、生徒相互の取り組みによって変化する」はこれもそのとおりであることが実証された。

10．結論

様々な角度からCALL&PRESENTATIONに関する研究に取り組んできた。しかしながら、この研究にはまだまだ限界点が見られる。ひとつには被験者の母集団が少ないことが挙げられる。実践時間の少ない中で行われた実態調査であるがゆえ、この実証が一般化を唱えるに至るには母集団の数を多くすることが今後の課題となるであろう。しかしながら、それを補う形で以前に行った調査と比較対象をすることで比較的母集団を多くさせ，数年を経てのほぼ同年代の被験者による意識の比較ができたことは救われるべきものであったかと思われる。加えて高等専門学校生と高校生といった学習形態が異なる母集団同士での比較ができたことも、様々な研究過程の中では成果があった。

他方、ほぼ同じPRESENTATION及びCALLを行なう上でも、同じ計画性の下に行われているものではないだけに、その結果は「ほぼ同じ」とまでしか言えないことにも限界点がある。調査の仕方も必ずしも全て一定であるわけではなく、追跡調査をする上では綿密な調査計画と分析の統一性が今後の課題となるであろう。これからの研究者に今後の発展を委ねていきたい。

これまで数多く取り組んできたDEBATE学習やCALLによる「発表(Presentation)」は、このような形で学生、生徒の成長に大いに還元されている。英語学習は大学入試合格という近い将来の自己実現の手段としてだけではなく、このように実践的に用いつつ実社会における大勢の前での発表という舞台などで用いられる形として、将来の学生の人格形成に対して大いに活用されている。

参考文献

・Aborigines The First Australians　http://www.ozrap.net.au/～senani/aborigin.htm

・All Blacks　http://www.nzrugby.com

・Ausubel, David.（1968）Educational Psychology: A Cognitive View. New York: Holt, Rinehart & Winston.

・@nifty(2003)　アジアの観光業会、SARSで300万人が職失う　NEWS@nifty
http://newsflash.nifty.com/news/te/te_reuters.JAPAN-116448.html

・Brown, H Douglas. (1994a) Principles of Language Learning and Teaching, 3rd Ed. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
・Brown, H Douglas. (1994a, 1994b) Teaching by Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
・Calb, Claudia(2003) The Mystery of SARS NEWSWEEK 2003.5.5 pp.13-17 New York: NEWSWEEK.Inc
・Calb, Claudia(2003) The New Bug The Mystery of SARS NEWSWEEK 2003.5.5 pp.18-19 New York: NEWSWEEK.Inc
・CBC News (2003) Where did SARS originate SARS: Questions and answers http://www/cbc.ca/news/indepth/background/sars/html
・CBC News (2003) Where did SARS originate SARS: Questions and answers http://www/cbc.ca/news/indepth/background/sars/html
・Famous Names in Australia(2003)-- Movie Stars, Sportsmen http://movies.yahoo.com/shop?d=hc&id=1800019113&cf=biog&intl=us http://www.weirdchiefpictures.com/mel.gibson.htm
・goo(2003) カナダの肺炎死者32人,2ヶ月ぶり肺炎死者ゼロ 封じ込めは可能とWHO http://www.news.goo.ne.jp/news/kyodo/kokusai/20030605/20030605a3950.html
・Hot Wired Japan(2003) 下水施設の不備が原因、コロナウイルス原因説 2003.6.18 http://www.hotwired.co.jp
・Krashen, Stephen et.al (1982) The Natural Approach and Language Acquisition Introduction The Natural Approach -Language Acquisition in the Classroom pp.21 Oxford: Pergamon.
・Long, H. Michael and Porter, A. Patricia (1985) Group work, interlanguage, and second language acquisition. TESOL Quarterly 19.
・Lemonic, Michael D et.al (2003) THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 pp.14-17, Toronto: TIME Canada Ltd.
・Lemonic, Michael D et.al (2003) GLOBAL REACH, THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 pp.16-17, Toronto: TIME Canada Ltd.
・Lemonic, Michael D et.al (2003) Curbing the Sperad, Rapid Mutation, Will It Keep Spreading? THE TRUTH ABOUT SARS TIME 2003.5.5 pp.18-19, Toronto: TIME Canada Ltd.
・MacQueen, Ken (2003) SARS:HOT SPOTS SARS: FEARAND LOATHING OF TORONTO MACLEAN'S 2003.5.5 pp.18-22, Toronto: Rogers Publishing Ltd.
・MacQueen, Ken (2003) VOICES FROM THR FRONT SARS: FEARAND LOATHING OF TORONTO MACLEAN'S 2003.5.5 pp.22, Toronto: Rogers Publishing Ltd.
・NIKKEI NET (2003) トロントでSARS死者新たに1人更に5人の可能性 http://biztech.nikkeibb.co.jp/wcs/leaf/CID/onair/biztech/medi/249953
・NIKKEI NET (2003) SARS電子顕微鏡写真 新型肺炎SARS 2003.6.19 http://health.nikkei.co.jp/sars/pindex.cfm?page=8
・Slavin, E. Robert. (1995) Cooperative Learning: Theory, Research, and Practice, Needham Heights, MA: Ally and Bacon.
・The History of Gold Coast
・Sport on The Gold Coast
・Weather on the Gold Coast, Australia (2003) http://www.reflections. com. au/Gold Coast/
・The History of the New Zealand Flag (2003) http://www.mch.govt.nz/nzflag/history.htm
・The Maoris (2003) : The History of Maoris & The Languages of Maoris http://www.helsinki.fi/ ～ksiazkie/babel/maori/index.html
・World Health Organization(2003) Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) http://www.who.int/csr/sars/en/
・World Health Organization(2003) Cumulative Number of Reported Probable Cases of SARS Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) http://www.who.int/csr/sars/country/2003_06_25/en/
・World Health Organization(2003) SARS: Number of Current Probable Cases as of 25 June 2003,18:30 GMT +2 Severe Acute espiratory Syndrome (SARS) http://www.who.int/csr/sars/en/map 2003_06_25.gif

・アサヒ・コム(2003)　SARS　トロントで新たに2人死亡　高校の休校も　新型肺炎
SARS 2003.5.29　http://www.asahi.com/special/sars/TKY200305290135.html
・唐澤博　(2000)「インターネット利用した授業実践例 教科書をリンクさせた授業」
https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/enetap/kyouka/eigo/h-kenkyu/ml02/ten00290.htm　00/07/14
・菊池久　(2000)「インターネットを使った授業へのアプローチ」
https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/enetap/kyouka/eigo/h-kenkyu/ml01/ten00282.htm　00/07/14
・京都府立紫野高校（2000）「京都府における環境問題」：http://207.217.172.76/Uplaod/Japan　00/06/07
・京都新聞(2003) 2003.6.20　http://kyoto-np.co.jp/news/flash/2003jun/02/CN20030620100
・厚生労働省(2003)　http://www/mhlw.go.jp/topics/2003/03/tp0318-lg.html
・厚生労働省(2003)　SARS感染地域に滞在された入国者の方へ　http://www/forth.go.jp
・在瀋陽日本国総領事館(2003)　SARS とは 重症急性呼吸器症候群
http://www.shengyang.cn.emb-japan.go.jp/SARS.index.html
・東京都感染症情報センター(2003)　重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：SevereAcute Respiratory Syndrome）重症急性呼吸器症候群（ＳＡＲＳ：Severe Acute Respiratory Syndrome）
http://idsc.tokyo-eiken.go.jp/SARS/sars-topics.html
・永井浩 (2000) TIMELY TOPICS pp.27　桐原書店：東京
・日本テレビ（2003）SARS 関連情報　ズームイン朝！　2003.6.24　東京：日本テレビ
・日本テレビ　(2003)　緊急放送　SARSとその恐怖、SARSに立ち向かった医師　スーパーテレビ特番
・日本テレビ　(2003)　緊急放送　SARSとその対応策　特命リサーチ200X
・北嶺中高等学校（2001）「北嶺の校技」　HOKUREI INFORMATION 2002　pp.9 札幌：北海道
・毎日新聞(2003)　http://dream.mainichi.co.jp/index.html
・文部省　(1998)「外国語科」　中学校・高等学校学習指導要領：　東京
・山西敏博（1999）「English Through Internet」　英語教育 2000　Vol.52-3　pp.6　開隆堂：東京,
・山西敏博（2000）「国際化時代の語学教育」　高等学校教育にみる国際化時代の語学教育・異文化理解と高校教育　第17回「金子賞」懸賞論文　入選者作品集 pp.77-97　(財)　金子国際文化交流財団」2000　：東京,
・山西敏博（2000）「２１世紀から見た２０世紀の歴史――　シンガポールの視点から見た「太平洋戦争」と学生の意識――」　苫小牧工業高等専門学校　紀要第39号
・山西敏博（2002）「Globalizationと高校教育」　高等学校教育にみる国際化時代の語学教育・異文化理解と高校教育　第19回「金子賞」懸賞論文　入選者作品集 pp.77-97　(財)　金子国際文化交流財団」2002：東京,
・吉住知文（2000）「開発教育教材 インドヒマラヤの森林開発のロールプレイ」開発教育協議会ＭＬ：https://iw.nifty.com/iw/nifty/mail/2G6IPGAP.html　00/02/21

＊注　ＭＬ Mailing List：所属団体の登録会員に対して送られてくる情報

（平成17年12月12日受理）